

# 「花とみどりの力」で復旧支援に取り組む

こづみ のぼる  
古積 昇 氏

## 1. 経営の概要

「古積造園土木(株) (以下、古積造園と略記)」は宮城県仙台市太白区に本店を構え造園業を営んでいる。公共事業では街路樹や公園の造園工事・緑地の維持管理をはじめ、河川の護岸工事などの土木工事、建築関係では屋上の特殊緑化・ビルなどの壁面緑化、民間事業では個人住宅の外構・庭園工事、ガーデニング相談、手入れなどの維持管理業務を行っており、庭園工事では洋風庭園のみならず和風庭園の作庭も得意としている。



創業のきっかけは、農業を行いながら樹木や盆栽などの生産・販売も行っていましたが、先代の古積宏氏が庭づくりを本格的に始めたことにより、昭和 39 年同県岩沼市で創業した。昭和 61 年に株式会社へと改組、平成 2 年には仙台市へ本社を移転した。現在では、従業員 23 名 (年商 4 億円) 岩沼市に支店、名取市に営業所を構えている。平成 22 年には仙台市が推奨する環境マネジメントシステム「みちのく環境管理規格 (みちのく EMS)」を取得し、地域を中心に緑化事業を通して環境問題への取り組みに力を入れている。ここでは、造園業を営む古積造園の後継者である古積昇氏 (以下、古積氏と略記) の経営への関わり方と震災・復興への考えを紹介する。

## 2. 若手後継者としての経営への関わり

古積氏は、父の古積宏氏が経営してきた古積造園を昨年の 8 月に後継し、42 歳で代表取締役となった。造園業を営む父の背中を見て育った古積氏は、幼い頃から父や従業員と一緒に働くうちに自然に仕事が身についた、と語ってくれた。いつも楽しそうに働き、色々なエピソードを話してくれる父の言葉はストレートに届き、単純に造園という仕事は楽しいものだなと思っていた。しかし、いつかは経営者になるのかなと意識した出来事があった。高校生の時、ちょうど昭和 59 年、その頃会社は今のようには決まった休みはなく、雨の日が休みであった。職場と自宅は同じ敷地内にあり、日曜日に友人とスキーに行くために道具を準備していたところに従業員が帰ってきた。そして従業員が「こんな忙しい時にのんきにスキーとは、息子なのか」と、浮れ気分であった古積氏はその言葉の重みにハッと、楽しみにしていたスキーを諦め、日曜日は職人と一緒に現場で働いた。そして、その頃から家業を継ぐことを少しずつ意識してきたという。

高校卒業後、予備校に通いながら大学進学を試みるが結果ならず。進学を諦め京都にある造園会社で 3 年ほど修行した。庭そうじから樹木の手入れ、作庭まで造園に関する専門的な技術を学んだ。当時の修行先には古積氏と同様に造園業の後継者が多く勤めていたが、仲間の殆どが大学や造園の専門学校を卒業していることを知った。造園の知識も豊富で、現場だけでは習得できないものがあると思いはじめ、改めて大学での専門知識の習得の必要性を感じたという。その後、東京農業大短期大学部農業科造園コース (後の環境緑地学科) に入学し、専門知識を学ぶとともに将来同じ立場になる多くの仲間達との関係を築き上げた。卒業後は東京都内の造園コンサルタント会社に勤務し設計業務から営業マンとしても経験を積んだ。

平成 10 年、先に会社で働く弟から、そろそろ帰って来てほしいと話があり宮城に戻った。工事部門に加え設計部を立ち上げ、専務取締役を経て、昨年 8 月に現職となった。代表となった古積氏は現在「仕事の役割分担」と「従業員との信頼関係の構築」に特に力を入れている。仕事の役割分担に関しては、営業・設計・受注するまでは古積氏、受注後の現場対応は、弟である専務取締役の古積実氏に任せている。従業員との信頼関係の構築に関しては、日々現場が変わる作業内容を踏まえ、従業員の性格・技術力の特徴を見極めて、その現場に関わる従業員の組み合わせ、特に責任者には気をつかう。責任者となる従業員自身が、「会社から仕事をやらされている」という意識ではなく、「会社は自分に仕事を任せ

てくれている」と認識できれば現場は上手くいくと古積氏は語る。

経営者として従業員との良好な関係はもちろんのこと、従業員同志がお互いの技術力を高め合うことができれば会社全体のレベルアップに繋がれると思っている。また、古積氏自身の現場での経験から、トップダウンだけでなく現場で働く従業員の意見を受け入れることに重きを置いて、教育するだけでなく、自分達自信で考えながら仕事に取り組み、物を作り上げていく、その繰り返しの中で人材が育ってくれば会社にとって大きな力になるはずという。

### 3. 震災の被害状況と今後の対応

東日本大震災における古積造園の具体的な被害は以下のとおりである。地震によって会社の建物は直接的な被害はなかったものの、作業現場は津波の被害で植栽工事前の土が全て流失し、石油製油所内ということもあり緑地帯には油が流れ込んだ。一方、火力発電所でも作業に入っていたが震災当日は作業がなく人的被害もなかったが、他の工事の作業員の方が逃げ遅れ不幸にも亡くなったという。

その他被害は、バックホウ1台、トラック2台、営業車2台、また従業員の家が2件全壊、2件半壊の被害を受け、従業員は現在岩沼市内の仮設住宅に家族と暮らしている。

また、県から委託を受けて緑地管理をしていた沿岸部の海浜公園が全壊し、契約終了前にして契約打ち切りとなり雇用・収入見込みの見直しが必至となった。

さらに福島第一原発の事故に起因する放射性物質放出の影響による危険性も示唆されている。特に、土を直接触る仕事である造園業は、降下する放射性物質による従業員の健康被害の可能性が考えられることから、独自に放射線量の測定を行い安全が確認されてから作業をするなど、従業員の健康を第一に考えた作業を心掛けている。古積造園は放射性物質を含む土の撤去などや廃棄、降下した放射性物質による被害などに対応するため、地域の造園業としての重要な役割を果たしている。

沿岸部の松林はほぼ全滅し、倒れずに辛うじて生き残った木々も徐々に枯れてきていおり、赤茶けた景色が広がっている。農業従事者にとっては防潮林の早い復旧が望まれているところでもあるが、倒れた松の撤去さえもまだ手付かずであり見通しがついていない。撤去作業はもちろんのこと、植林が行われるような時期が来たら造園業界をあげて協力していきたい、それまでは復旧に全力をあげて取り組みたいと古積氏は語る。

震災直後から古積氏はボランティアで給水活動を行い、その活動を知った仲間たちが関東から何か応援できないかということで、以前東京で勤めていた会社の仲間達 60人 (K-smile) と共に救援物資の配布を行ってきた。食糧はある程度満たされてきた中で、次にできることは何かと考え、造園人として「花を見てもらうことで被災された方々の気持ちを和らげてあげたい」という想いから、幼稚園や小学校にはチューリップのプランターや花を植え、仮設住宅では、花壇をはじめミニ菜園を提供するなどの活動を行ってきた。

また、「子供たちの笑顔が見たい!」という想いのもと、石巻にある支援先の小学校の校庭で 260 匹の鯉のぼりを揚げるなど、被災した人々の精神面を支える支援活動も展開している。



写真1 横倒しになった車両



写真2 壊滅した海浜公園



写真3 被害を受けた松林



写真4 避難所に花プランター



写真5 仮設住宅のミニ菜園



写真6 校庭に260匹の鯉のぼり